

話し合いの会話データ分析活動における学び
—日本人学生と外国人留学生が参加する学部授業の分析—

**Learning Through Engaging in Conversational Data
Analysis on Discussions:
An Analysis of an Undergraduate Course for Japanese Students
and International Students**

中井 陽子

東京外国語大学大学院国際日本学研究院

NAKAI Yoko

Institute of Japan Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 先行研究

- 1.1. 話し合いの会話の規範・評価
- 1.2. 話し合いを取り入れた授業実践の研究
- 1.3 先行研究のまとめと本研究の授業実践の関係

2. 授業概要

3. 受講生のワークシート記述の分析

- 3.1. 話し合いの会話に関する事前知識・規範の記述
- 3.2. 話し合いの悪い例（即興）の分析の記述
- 3.3. 受講生自身の話し合いの実践の振り返りの記述
- 3.4. 話し合いの分析活動での気づき・今後気を付けたい点の記述

4. 本授業での受講生の学びの考察

5. 話し合いの方法を学ぶための教材開発に向けた提案

おわりに

キーワード：話し合い、会話データ分析活動、振り返り、気づき

Keywords: Discussion, Conversational data analysis activities, Reflections, Awareness



本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

要旨

本研究では、日本人学生と外国人留学生が参加する学部授業において、より良い話し合いについて考える活動を通して、受講生がどのようなことをどのように学んだか分析した。本授業では、話し合いがうまく行く方法とうまく行かない要因について検討した後、話し合いの良い例と悪い例のビデオ教材の分析活動を行った。そこで意識化した留意点をもとに、実際に受講生が話し合いの実践・振り返りを行った。そして、今後の自身の話し合いで活かしたい点を検討した。これらの活動から受講生達は、「①事前準備・前提」「②役割分担・進行」「③参加態度」「④話し方(内容・意見・非言語行動)」「⑤相手への配慮・理解」「⑥環境・人間関係」といった話し合いの留意点について意識化していることが分かった。また、日本人学生と外国人留学生がともに話し合いの仕方について検討することで、新たな視点を得ている様子も見られた。これらをもとに、今後の話し合いの方法を学ぶための教材開発に向けた提案を行った。

Abstract

In this study, the author analyzed what students learned, and how they learned it, in the course of engaging in activities designed to encourage them to think about how to have better discussions, as part of an undergraduate class attended by both Japanese students and international students. In this class, after examining in what way the discussions went well and in what way they did not go well, the students analyzed video clips of good and bad examples of discussions. Informed by the points they had been made aware of, the students engaged in actual discussions and in reflections on those discussions. Then, they examined the points that they would like to utilize in their own discussions in the future. Through these activities, the students were made conscious of the following points regarding engaging in discussion: (1) advance preparation/premise, (2) division of roles/progress, (3) participation attitude, (4) speaking style (contents, opinions, and nonverbal behaviors), (5) consideration/understanding of the interlocutor, and (6) environment/human relations. It was also observed that Japanese students and international students, by examining how they should engage in discussions with each other, gained new perspectives on the matter. Given these results, the author has made proposals for the future development of teaching materials related to discussion.

はじめに

グローバル化が進む現在、日本語母語話者も非母語話者も様々な人と日本語で円滑な話し合いができる能力が求められる。話し合いの能力を高めるためには、より良い話し合いとはどのようなものか、どのような時に話し合いがうまくいかないのかといった、話し合いの仕方の規範を意識化し、自身の話し合いの仕方を振り返り、評価してみることが重要であると考えられる。

話し合いの仕方を客観的に考え、意識化するためには、話し合いの会話データを分析してみることもその一助となる。中井(2008、2009、2012、2018a,b、印刷中)では、日本語授業、日本語教員養成講座、学部選択授業において、受講生が自身や他者の会話データを分析する会話データ分析活動を行い、日本語の会話を客観的に見る視点を養い、日常の会話の特徴を意識化し、自身の会話を振り返り、改善していく姿勢がどのように持てるようになったかを分析している。そして、中井(2018a)では、こうした会話データ分析活動を取り入れた授業のために開発した教材からの受講生の学びについて分析している。

そこで、本研究では、中井(2018a)で開発した教材に追加して、話し合いの会話データを用いて分析活動をするための教材を開発し、日本人学生と外国人留学生が参加する学部授業において試用した結果について検証する。この授業では、日本語でのより良い話し合いの規範や観点について考える活動を行った。本活動を通して、受講生がどのようなことをどのように学んだか分析する。まず、1節で、話し合いの会話の規範・評価、および、話し合いを取り入れた授業実践の先行研究を概観する。次に、2節で、本研究で分析する授業概要について述べ、3節で話し合いの会話に関する受講生のワークシート記述の分析を行う。これらをもとに、4節で本授業での受講生の学びの考察を行い、5節で話し合いの方法を学ぶための教材開発に向けた提案を行い、最後に、今後の課題を述べる。

1. 先行研究

話し合いの能力を高めるためには、良い話し合いとはどのようなものかといった規範や、その規範がどの程度実現されて良い話し合いが行われているのかといった評価基準には、どのようなものがあるかを知る必要がある。また、これまでの話し合い教育の中で、どのような項目がどのように教育されてきているのかを見ることも重要である。そこで、まず、話し合いの会話の規範・評価の先行研究を概観する(1.1)。次に、話し合いを取り入れた授業実践の先行研究を概観する(1.2)。

1. 1. 話し合いの会話の規範・評価

話し合いに参加する者は、話し合いの会話はこうあるべきだという規範をある程度持って話し合いを進めていると考えられる。小笠(2001:119)は、規範について「暗黙の了解の下に持っている行動のルール」と定義し、大学院の授業中の話し合いにおける話題展開の規範にはどのようなものがあるかについて分析している。分析データは、受講生 18 名が参加する授業中の話し合いの会話データ(20～40分間×4本)、および、同受講生に授業中の話し合いで気を付けていること等を聞くアンケート調査(自由記述形式)のデータである。話し合いの会話データにおける話題の変化を分析

した結果、話し合いの中には、授業内容と関連のある話題を展開させ、関係のない話を長く話さないといった、話題の選択・派生の仕方について一定の規範を共有して参加している様子が見られたという。そして、アンケート調査の結果から、大学院生達は、授業中の話し合いの際、時間配分、言葉遣い、話の流れ、雰囲気気に気を付けていると回答する者が多かったとしている(小笠 2001)。

さらに、話し合いの規範がどの程度、実現されて、自身や他者の話し合いが行われているかを評価していくことも、話し合いを行う技術を磨く上で重要である。水上ほか(2005)では、プロの司会者8名によるグループディスカッションの評価基準として、「発言のバランス」「自発発話の有無」「参加者間の相互作用の有無」「話題の発展性」「話題の目的に集約すること」という項目を挙げている。また、森本ほか(2016)では、日本語学習者と日本語母語話者による話し合いのビデオ映像8本を対象に、日本人学生49名と留学生58名に印象評定を行っている。その結果、話し合いに対する評価の観点として、「緻密で深まりのある議論」「場の雰囲気」「活発な議論」「まとまりのある議論」が浮かび上がってきたとしている。

このような良い話し合いの規範や評価基準は、話し合い教育で受講生に何を身に付けさせるかという点で有益な知見となると考えられる。次に、話し合い教育の方法(スタイル)と内容を見る。

1. 2. 話し合いを取り入れた授業実践の研究

富田(2010)は、これまでの英語や日本語等での議論教育の先行研究を踏まえ、議論教育について、表1のように、4つのスタイルに分類している。

表1 議論教育における4つのスタイル(富田2010筆者要約)

1. ルール提示型	話し合いのルールを提示して守らせることで議論活動を促進させる。
2. 気づき支援型	議論をする中で学習者が自らの気づきを通して、スキルや態度を獲得するように促す。
3. 枠組み提示型	議論の基盤となる少数のスキルについて反復練習を行い、議論に生かす。
4. 協調学習型	他者との交渉や意図を共有しつつ課題に取り組む中で、議論力を育成する。

このうち、「1. ルール提示型」「2. 気づき支援型」「3. 枠組み提示型」は、授業で話し合いの仕方についてある程度明示的に取り上げ、受講生に意識化させて教育を行うため、本研究で分析対象とする授業活動を考える上で参考になる。以下、これまでの日本語での話し合い教育の先行研究を、富田(2010)の議論教育における「1. ルール提示型」「2. 気づき支援型」「3. 枠組み提示型」の枠組みに当てはめて分類してみる。

まず、「1. ルール提示型」と「2. 気づき支援型」を混合した話し合い教育としては、大塚ほか(2009)、大塚・森本編著(2011)等があげられる。大塚ほか(2009)では、大学生によるディスカッションに対する印象評価の結果をもとに、「誠実な参加態度、対等な関係性、議論の活発さ、意見の多様さ、議論の深まり、議論の管理、議論の積上げ」という7項目からなる「診断シート」を作成している。そして、この「診断シート」を用いて学習者が自身やピアの話し合いを評価することで、自分達の問題点に気づき、改善していくための活動を提案している(大塚ほか2009)。その後、大塚・森本編著(2011)において、この「診断シート」を話し合いのトレーニングができるように教材として出版している。このような教育方法は、話し合いの「診断シート」の項目を事前に見せることで項目を意識

化し(1. ルール提示型)、これをもとに実際に話し合いを行い、評価することで気づきを促す(2. 気づき支援型) ことができると言える。

次に、「3. 枠組み提示型」としては、胡(2018)、結城(2020)等が挙げられる。胡(2018)では、中国の大学の中級の日本語授業において、話し合いに必要な日本語の文型リストの導入を行い、その後、実際に話し合いの活動を行わせている。なお、文型リストには、「話し合いを始める」「誰かに意見を聞いてみる」「意見を整理する」「自分の意見を話す」「相手に同意する」「相手に反論する」「根拠を述べる」等の表現が提示されている。また、結城(2020)では、上級の日本語授業において、表現集(例:賛成意見、反対意見、意見を述べる、意見を求める、確認する、まとめる)を提示し、使用練習を行っている。これらの「3. 枠組み提示型」の教育方法は、話し合いの際に用いる表現を受講生に明示的に示し、実際に使えるようにすることを目指していると言える。

1. 3. 先行研究のまとめと本研究の授業実践の関係

以上の先行研究で取り上げられている話し合いの会話の規範・評価・教育の項目を内容ごとに分類・整理したところ、表2のように、「①役割分担・進行」「②参加態度」「③話し方」「④環境・人間関係」の4つに分けられた。

表2 話し合いの会話の規範・評価・教育の項目に関する先行研究まとめ

①役割分担・進行	1. 司会の仕方	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いを始める(胡 2018) 誰かに意見を聞いてみる(胡 2018)、意見を求める、確認する(結城 2020) 意見を整理する(胡 2018)、まとめる(結城 2020)
	2. 進行	<ul style="list-style-type: none"> 議論の管理(大塚ほか 2009) 発言のバランス(水上ほか 2005)
②参加態度	1. 態度	<ul style="list-style-type: none"> 自発発話の有無(水上ほか 2005) 誠実な参加態度(大塚ほか 2009)
	2. 相互作用	<ul style="list-style-type: none"> 参加者間の相互作用の有無(水上ほか 2005) 活発な議論(森本ほか 2016)、議論の活発さ(大塚ほか 2009)
③話し方	1. 内容	<ul style="list-style-type: none"> 話題の選択・派生の仕方(小笠 2001) 話題の発展性(水上ほか 2005)、意見の多様さ(大塚ほか 2009) 緻密で深まりのある議論(森本ほか 2016)、議論の深まり(大塚ほか 2009) 話題の目的に集約すること(水上ほか 2005)、まとまりのある議論(森本ほか 2016)、議論の積上げ(大塚ほか 2009)
	2. 意見の述べ方	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見を話す(胡 2018)、根拠を述べる(胡 2018) 相手に同意する(胡 2018)、賛成意見、意見を述べる(結城 2020) 相手に反論する(胡 2018)、反対意見を述べる(結城 2020)
④環境・人間関係		<ul style="list-style-type: none"> 場の雰囲気(森本ほか 2016) 対等な関係性(大塚ほか 2009)

これらの先行研究を参考にしながら、本研究では、受講生自身の話し合いについての事前知識・規範を整理し、その後、会話データ分析活動を通してより良い話し合いについてさらに意識化し、これをもとに、実際に話し合いを行ってみて振り返るという「1. ルール提示型」「2. 気づき支援型」の授業実践を行い、そこで受講生がどのようなことをどのように学んだか分析する。具体的には、

どのような活動によって、表2でまとめたような「話し合いの会話の規範・評価・教育の項目に関する先行研究のまとめ」、および、それ以外の話し合いの留意点が受講生に意識化されたのかを詳細に見ていく。その際、日本人学生だけでなく、外国人留学生から挙がってきた観点にも着目する。

2. 授業概要

本授業は、2018年度10月～1月(90分 x 13回)に筆者が行った学部選択科目である。授業の目的は、日本語の会話データ分析を通して自身の会話を振り返ることであった。受講生は、日本人学生(25名、学部3、4年生)と外国人留学生(7名、学部3年生、研究生、大学院生)であった。なお、外国人留学生は、ブラジル、中国、マレーシア出身の者で、日本語レベルは中上級～超級レベルであった。

第1回～第10回の授業では、雑談、誘い、依頼、インタビュー会話、話し合い、体験談・スピーチ・話し合いの分析活動を行い、第11回～第13回で、グループに分かれて、独自の会話データを収集し、分析・発表する活動を行った¹⁾。

これら13回の授業のうち、第9回の授業において、「話し合い」の会話を取り上げた。本研究では、第9回に行った「話し合い」の分析活動を対象とする。第9回の分析活動(1)～(5)の流れと使用教材の内容は、以下の通りである。

- (1)事前知識・規範の検討: 受講生が3～4人のグループになり、話し合いの設定、話し合いがうまく行く方法とうまく行かない要因について検討した。これにより、話し合いを行う際の事前知識や、話し合いはこうあるべきだという規範を意識化する機会とした。
- (2)会話データ分析活動①: 話し合いの仕方の例を明示的に示すために作成された、6つの話し合い場面のビデオ教材を受講生が視聴し、良い点・悪い点を言語面・非言語面から視覚的に分析した。このビデオ教材の中では、学部生4名が「国際交流会の企画」について話し合っている。ビデオ教材の6つの場面は、良い例と悪い例のペア(計12例、各30秒程度)になっている。各場面で「A.表現方法、話す順番、話す量、雰囲気づくり」「B.相手との関係性の維持」「C.相手への気づかい」「D.論理性・要点の伝え方」「E.内容の深まり・具体性」「F.聞き手の役割」という、6つの話し合いの分析ポイントのうち、1つのポイントが明示的にわかるように、シナリオを作成して撮影してある²⁾。
- (3)会話データ分析活動②: 話し合いの仕方の悪い例(シナリオなしの即興)を視聴し、悪い点・改善点を言語面・非言語面から視覚的に分析した。この悪い例のビデオ教材の中では、学部生4名が「国際交流会の企画」について話し合っているが、即興でより長く悪い例を演じている³⁾。そのため、(2)のシナリオがあるビデオ教材よりも、受講生にとってより臨場感のある話し合いの例として分析できることをねらった(会話例は後掲)。
- (4)話し合いの実践・振り返り: 受講生自身が3～4人のグループになり、「国際交流会の企画」(会の目的、日時、場所、参加者、会の内容と流れ等)について決める話し合いを疑似的に行った。その後、その話し合いで良かった点・不足点・難しかった点について、上記(1)～(3)までの活動で学んだことを踏まえて、受講生が各自振り返った。
- (5)今後の活かし方の検討: 受講生各自が今回の授業での話し合いの分析活動で気づいた点・今後気を付けたい点について考えた。

これら (1) ~ (5) の分析活動において、個人とグループで考えた点について、受講生はワークシートに記入し、クラス全体でも報告して共有した。表 3 は、「話し合い」の分析活動 (1) ~ (5) で用いたワークシートの設問項目である。

表3 「話し合い」の分析活動のワークシート設問項目

目的・活動	ワークシートの設問項目	本研究で 分析を行う節
(1) 事前知識・規範の検討	<ul style="list-style-type: none"> • どんな時にどんな人と何について話し合いをするか。 • どうすれば話し合いがうまく行くか。 • よくない話し合いの仕方と話し合いがうまくいかない要因は何か。 	3.1 節
(2) 会話データ分析活動①	<p>「国際交流会の企画」についての話し合いの仕方の良い例と悪い例のビデオ教材（シナリオあり）を視聴し、良い点と悪い点を分析して記入する。</p> <p>6つの分析ポイント：</p> <ul style="list-style-type: none"> A. 表現方法、話す順番、話す量、雰囲気づくり：良い例・悪い例 B. 相手との関係性の維持：良い例・悪い例 C. 相手への気づかい：良い例・悪い例 D. 論理性・要点の伝え方：良い例・悪い例 E. 内容の深まり・具体性：良い例・悪い例 F. 聞き手の役割：良い例・悪い例 	—
(3) 会話データ分析活動②	「国際交流会の企画」についての話し合いの仕方の悪い例（シナリオなしの即興）のビデオ教材を視聴し、悪い点・改善点を分析して記入する。	3.2 節
(4) 話し合いの実践・振り返り	受講生自身がグループで行った「国際交流会の企画」の話し合いの実践について、良かった点・足りなかった点・難しかった点を記入する。	3.3 節
(5) 今後の活かしの検討	話し合いの分析活動で気づいた点・今後の自身のコミュニケーションで気を付けたい点を記入する。	3.4 節

以下、受講生のワークシート設問項目 (1)、(3)、(4)、(5) の記述内容について分析する⁴⁾。設問項目 (2) は、上述の通り、教師があらかじめ 6 つの分析ポイント A ~ F (表 3 の (2)) を示して良い例と悪い例のビデオ教材を見せたことにより、受講生間の記述で大きな違いは見られなかったため、今回の分析対象からは除外する。

3. 受講生のワークシート記述の分析

受講生がワークシートに記述した内容を分類して、以下の分析を行う。まず、3.1 で、受講生が話し合いの会話に関してどのような事前知識・規範を意識化したかを分析する。次に、3.2 で、話し合いの仕方の悪い例（即興）のビデオ教材をどのように分析していたかを見る。さらに、3.3 で、受講生自身が行った話し合いの実践をどのように振り返っていたかを分析する。最後に、3.4 で、話し合いの分析活動で何に気づき、今後の自身のコミュニケーションにどのように活かそうとしていたのかをまとめる。これにより、より良い話し合いについて考える活動を通して、受講生がどのようなことをどのように学んだかを明らかにする。

3. 1. 話し合いの会話に関する事前知識・規範の記述

表4は、「(1) 事前知識・規範の検討」活動で受講生がワークシートに記述したものについて、筆者が表2の「話し合いの会話の規範・評価・教育の項目に関する先行研究まとめ」の分類を参考に、内容ごとに分類し、項目名を付けてまとめたものである。この活動では、受講生は話し合いの会話に関する事前知識・規範についてグループで話し合っって意識化したことをワークシートに記入した。ここから、受講生は、まず、話し合いについて、「①目的」「②相手」「③内容」「④場面」についての事前知識を整理していたことが分かる。次に、話し合いがうまく行く方法とうまく行かない要因については、「①事前準備・前提」「②役割分担・進行」「③参加態度」「④話し方(内容・意見)」「⑤相手への配慮・理解」「⑥環境・人間関係」に関する多岐にわたる事前知識・規範を出し合い、それらを意識化していたことが分かる。こうした事前知識・規範は、受講生達の日々の友人、家族、部活、授業、アルバイト等での話し合いの経験等から培われたものであると考えられる。そして、本授業においてグループで意見交換を行うことで、受講生一人一人が意識化するよりもさらに多角的な観点が意識化されたと言える。

表4 受講生が意識化した話し合いの会話に関する事前知識・規範(各記述は筆者要約)

どんな時にどんな人と何について話し合いをするか	
①目的 <ul style="list-style-type: none"> ・何かを決める、問題を解決する ・全員が同意した結果を出す ・意見交換して理解を深める ・誤解を解く 	③内容 <ul style="list-style-type: none"> ・計画、ルール、問題、予定等 ・特定的话题、共通の関心のある話題 ・イベント企画、活動内容、予算、役割分担
②相手 <ul style="list-style-type: none"> ・友人、家族 ・教員、クラスメート ・部活・サークルの部員、幹事同士 ・会社の同僚、アルバイト先の人 ・店員 ・問題に関わりのある人 	④場面 <ul style="list-style-type: none"> ・授業中のディスカッション、グループワーク ・部活・サークル、文化祭の話し合い、運営 ・行く場所や食事場所を決める ・仕事の会議、家族会議 ・商品購入 ・恋人の誤解を解く
話し合いがうまく行く方法	
①事前準備・前提 <ul style="list-style-type: none"> ・事前に議題を共有し、予め意見を考えておく ・前提知識を整えておく ・根回ししておく 	話し合いがうまく行かない要因 ①事前準備・前提 <ul style="list-style-type: none"> ・前提となるゴールや方向性の認識が異なる ・準備不足、共通知識がない
②役割分担・進行 <ul style="list-style-type: none"> ・進行役・まとめ役を決めて、仕切っていく ・書記を決めて記録していく、ホワイトボードや紙に記録し、共有認識を取りやすくする ・時間管理・時間配分に気を付ける ・短時間で区切って話す ・ゴールやテーマを決めて明確にしておく ・指名して、話す機会を均等にする ・話す人の順番に気を付ける 	②役割分担・進行 <ul style="list-style-type: none"> ・ゴールを決めて進めない ・まとめ役がおらず、好き勝手に意見を言い合う ・司会者が仕切れない、段取りが悪い ・時間配分を決めておらず、長引く、決まらない ・記録していかない ・意見がまとまらず、結論が出ない

<p>③参加態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・積極的に参加する、意見を言う ・自分の立ち位置をはっきりさせる ・相手の話を聞く ・感情的にならず、冷静な態度を保つ ・柔軟な姿勢を持つ、様々な可能性を考える 	<p>③参加態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・積極的に一人で話しすぎる ・自己中心的な態度、相手の話を聞かない ・自分の意見を言わず、相手の意見に賛成ばかりしている ・欠席、居眠り、注意欠損で参加しない、消極的な参加態度で協力的でない ・誰も話さない
<p>④話し方(内容・意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前提情報を共有して共通認識を持って話す ・自分の意見を簡潔に述べる、明確に述べる ・テーマに沿って話す ・ゴールを常に意識し、反れたら修正する 	<p>④話し方(内容・意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長く話す ・曖昧な話し方をしすぎる ・話題から脱線して、本題に戻せない ・事実と合わないことを言う
<p>⑤相手への配慮・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お互いの立場・面子・距離感を考える ・相手の文化・背景を知る ・相手に配慮した言葉遣いをする ・相手に失礼のないように自分の意見を伝える ・相手の意見を尊重する、最後まで聞く ・相手の意図をくみ取る ・相手の意見を否定・反論ばかりせず、根拠や代案を出す、前置きを添えて柔らかく述べる ・相手の意見と妥協点を見つける、譲歩する 	<p>⑤相手への配慮・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の立場を考えない ・相手に話すべきではないことを話す ・言葉遣いが悪い ・相手の意見を尊重せず、自分の主張ばかり言う ・相手の発話意図がくみ取れない ・自分の意見や代案もなく、否定ばかりする ・直接的な表現で否定する ・論破を目的にしている
<p>⑥環境・人間関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話しやすい雰囲気・環境作り 	<p>⑥環境・人間関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雰囲気が悪い、席順が悪い ・上下関係等で自分の意見が言えない、発言機会が不均等になる ・言語や文化の違いがある

また、表 2「話し合いの会話の規範・評価・教育の項目に関する先行研究まとめ」の項目と表 4「受講生が意識化した話し合いの会話に関する事前知識・規範」の項目を比べると、おおよその項目が重なるとともに、表 4の方がそれをより詳細化した記述がみられる。そして、表 4では、「①事前準備・前提」「⑤相手への配慮・理解」といった表 2で特に強調されていない項目の記述が見られた。これは、表 2の先行研究が主に他者の話し合いの評価や授業中の教育項目をもとにしたものであるのに対し、表 4は受講生自身が当事者として過去に経験した話し合いの事前・事中・事後の全てを含めた反省点や留意点をもとに事前知識・規範として意識化したものであるためではないかと考えられる。

3. 2. 話し合いの悪い例（即興）の分析の記述

表5は、「(3) 会話データ分析活動②」において受講生がワークシートに記述したものを筆者が内容ごとに分類し、項目名を付けてまとめたものである。この活動では、受講生が話し合いの悪い例シナリオなしの即興、5分程度)のビデオ教材を視聴し、話し合いの「悪い点・改善点」を分析した結果をワークシートに記入した。ここから、受講生は、表4の事前知識・規範の記述同様、「①事前準備・前提」「②役割分担・進行」「③参加態度」「④話し方」「⑤相手への配慮・理解」「⑥環境・人間関係」に関して、話し合いがうまく行っていない要因を挙げていた。そして、表4よりも、表5の方がより具体的に話し合いの様子を指摘する記述が多く見られた。特に、「③参加態度」「④話し方」に関しては、姿勢、表情、視線、音調等の「非言語的行動」を指摘している点は、表4の事前知識・規範では挙がってこなかった項目である(表5下線部)。悪い例のビデオを実際に視聴することで、受講生は非言語行動等の視覚情報や音調をより臨場感を持って観察できたものと言える。

表5 話し合いの悪い例（即興）に対する受講生の分析の記述（各記述は筆者要約、下線は筆者が付した）

①事前準備・前提		<ul style="list-style-type: none"> ・前提の情報共有ができていない ・共通目的に対して否定的な態度を持っている
②役割分担・進行	1. 司会の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・司会者が同調するだけで、流されており、うまくコントロールして進められていない ・司会者が振り回されていて、オドオドして困惑している
	2. 進行	<ul style="list-style-type: none"> ・主に二人だけが意見を戦わせている ・話題を強い言い方で終わらせている ・話を蒸し返す ・途中で意見を出さない人を指名して意見を言う機会を与えない ・意見がまとまらない
③参加態度	1. 態度	<ul style="list-style-type: none"> ・話を前に進めようとする態度が見られない ・言い方や話すタイミングが話し合う姿勢ではない ・自分の意見を否定されて、ふてくされた態度を取っている ・あいづちが少ない ・無関心で人の話を聞かず、まったく意見を出さなくて、居眠りしているような人がある
	2. 非言語行動	<ul style="list-style-type: none"> ・肘をついて話し、<u>姿勢が悪い</u> ・疲れた表情 ・視線が下がっている、話す時に目を合わせない
④話し方	1. 内容	<ul style="list-style-type: none"> ・主観的な意見ばかり言う ・重要でない点にこだわる
	2. 意見の述べ方	<ul style="list-style-type: none"> ・「でも」から話し始める ・揚げ足を取っている ・否定して文句を言うだけで、自分の意見や代案を出さない ・相手を完全否定し、攻撃的な話し方で感情的に責めすぎている ・同意していないのに、諦めた感じで同意を示す
	3. 非言語行動	<ul style="list-style-type: none"> ・音調等の言い方が強すぎる
⑤相手への配慮・理解		<ul style="list-style-type: none"> ・関係性を気にしない ・相手を尊重する気持ちが全くない ・寛容さが足りない ・丁寧な言葉遣いができていない ・相手が納得しないまま、無理に話を進める
⑥環境・人間関係		<ul style="list-style-type: none"> ・殺伐とした険悪な雰囲気 ・後輩は意見が出しにくそうだ

ここで、受講生が分析した話し合いの悪い例のビデオ教材(即興)の中で、実際にどのような悪い例が演じられていたのかを見てみる。会話例(1)は、話し合いの悪い例(即興)の会話開始部からの一部である。この部分では、「国際交流会の企画」について、会の目的・日時について話し合っている。Sが司会者と書記を兼ねている。Eが主観的な意見を述べ、それに対してIが強く反論し、Tが話し合いに不参加の態度を取るという設定で4人の参加者が即興で演じている。なお、会話例(1)の右側に「否定・反論する」「オドオドして確認する」「主観的な意見を言う」「攻撃的に反論する」「諦めた感じで同意する」「ふてくされる」「反論を蒸し返す」等、受講生が分析して記述していた点(表5)を示した。また、話し合いの進行が分かるように、「会の目的を確認する」「意見を求める」「進行を進めようとする」等も右側に記した。会話例(1)の各発話を見ると、受講生達がビデオ教材のどの発話部分を視聴して「悪い点・改善点」として指摘していたかが分かる。この悪い例は、教師の意図で分析ポイントを決めて演じた固定的なものではなく、演じ手同士の瞬間瞬間の相互作用の中で生まれてくる即興的なやり取りである。こうした即興によるビデオ教材は、よりリアルな話し合いの映像として、受講生が具体的な場面をイメージしながら「悪い点・改善点」を指摘しやすいのではないかと考えられる。

会話例(1)話し合いの悪い例(シナリオなしの即興)

1	S	じゃあ、みなさん、えっと、集まっていたいてありがとうございます。今日は、えっと大学の国際交流会をどのように行うかについての、話し合いをしたいと思いますので、じゃあまず会の目的なんですけど、まあ、X大生と、まあ留学生の、交流、普通に生活してるだけだと意外とあんまり会う機会がないので、交流する機会が、あるといいなことで、この会をするということで、いい、ですよね。 会の目的を確認する
2	I	はい。
3	S	はい、じゃあ、そういうことで、書いておきますね。えっとじゃあ何か、そうですね、いつやっりたいかとか、アイデアあればどんどん出していただければって思います。 意見を求める
4	E	目的、それでいいの？ 否定・反論する
5	S	あ、だ、めですか。 オドオドして確認する
6	E	え、私、結構会うけど。 主観的な意見を言う
7	S	(1)あ、(1)じゃあ、え？あー意外こんなの、こういう会{笑い}を作らなくても結構会ってるよ//ってことですか。 オドオドして確認する
8	E	うん、うん。
9	I	いやでも、会えない人のために、今回こういう交流会をしようって話になってんだからさ。 「でも」で始める・攻撃的に反論する
10	E	ああ、まあ。 諦めた感じで同意する
11	S	あ、ま、 オドオドする
12	I	別にそれでいいんじゃない？ 反論する
13	E	ああ、まあ、別に、うーん、まあ、いいと{笑い}思うけど。 諦めた感じで同意する・ふてくされる
14	S	あー。 オドオドする
15	I	いいよ、進めちゃっ//て。 強引に進行を促す
16	S	あ、そう、わかりました。えーと、{メモを取る} 進行を進めようとする
17	E	ふわっとしすぎじゃない？なんかその、会えないからって。現に会える人もいるんだしって思うと。 否定・反論を蒸し返す
18	S	(1)あー。 オドオドする
19	I	え、なんで？ 攻撃的に理由を問う
20	E	え、なんか、その、{笑い}会えない、なかなか会えないからっていうんじゃない、もうちょっとちゃんとした目的を、//したほうがいいんじゃない。 揚げ足を取って、意見を言う
21	I	え、じゃあ、え、じゃあ、ちゃんとした目的って何？ 攻撃的に確認する
22	E	いやそれは、これから話し合って決めることじゃない？ 会の目的を皆で決めることを促す
23	I	だから現にでも、実際交流できてない人達がいるからってということで、この交流会しようって話になってるんじゃないの？ 攻撃的に会の目的の確認をする
24	E	うーん。

25	I	(7)だからさ、そういう交流会一、がなんかその、そのちゃんとした目的、っていうのがあるならそれはそれでいいけど、別に今回はそういうことでやってる、やろうっていう話に、 //いいんじゃないかな。	会の目的の確認
26	E	わかったわかった。うーん、はい、はい。	諦めた感じで同意する・ふてくされる
27	S	あ、大丈夫、ですかね。じゃあ、そうですね。まあ日時、いつやったら、いいですかね？なにか、アイデアがあれば。	進行を進めていいか確認する・意見を要求する・オドオドする
28	I	(1)まあ放課後？	提案する
29	S	放課後。	
30	I	がいいんじゃないかな。	提案する
31	E	バイト、めっちゃ入ってるんだけど。	主観的な意見を言う
32	S	(1)あ。	オドオドする
33	I	いや、あなたは入ってるかも//しれないけどさ。	攻撃的に否定・反論する
34	E	ああ、まあ、うーん。	諦めた感じで同意する・ふてくされる
35	S	あ、一応、メモで書いときますね。	書記をする
(2分25秒間 中略)			
79	I	てか、さっきからずっと、あの、言ってないけど、何か意見ないの？	指名して意見を要求する
80	T	あ、ごめんなさい。話聞いてなかった//です。	話し合いに不参加だったことを述べる
81	E	え？{笑い}聞いてないとかあるの？//ヤバくない？この至近距離で。	感情的に責める
82	T	すいませーん。	謝る
83	E	//4人しかいないのに。	感情的に責める
84	T	いや、え、あ、そもそもこの会の目的って何でしたっけ？	会の目的の確認
85	E	いや、だ、え？	あきれて聞き返す
86	I	それは、最初に話した//じゃん！	感情的に責める
87	E	ちょ{笑い}なんで？何のためにここにいるのっていう感じなんだけど。	あきれて感情的に責める

3. 3. 受講生自身の話し合いの実践の振り返りの記述

表6は、「(4)話し合いの実践・振り返り」活動の際に受講生がワークシートに記述した内容の一部をまとめたものである。この活動では、受講生が話し合いビデオの分析活動を行った後、それを参考に、実際に自分達で「国際交流会の企画」の話し合いを行い、それについての振り返りをワークシートに記入した。なお、表6の外国人留学生の記述には、留学生の記号名(例：留学生A)を末尾に示し、日本人学生の記述と区別してある。

ここから、実際の話し合いを体験して振り返ることで、受講生が自分達の話し合いの「良かった点」と「不足点・難しかった点」を詳細に分析していることが分かる。特に、司会者として工夫していた点や戸惑っていた点、進行の様子等が当事者の内省として記述されている。

そして、「③参加態度」の「2.非言語行動」については、ブラジル人留学生Aが「ジェスチャー等の非言語的なコミュニケーションを理解するのが難しかった」(表6下線部)と記述していた。また、「④話し方」の「2.意見の述べ方」では、中国人留学生B、Cが意見を言う時、「言葉遣いが適切か心配だった」「反対意見を率直に言ってしまった」といった内容の記述をしていた(表6下線部)。ここから、外国人留学生の中には、日本語での話し合いにおける言語・非言語での表現・理解に

困難を感じた者もいたことが分かる。さらに、ブラジル人留学生 A が「反対意見がないと視野が狭くなることもある」とワークシートに個人の意見を記述し(表 6 下線部)、かつ、その後、授業の全体討論の際にこの記述について自身の意見として発言した。それを聞いて、全受講生 32 人中 7 人(日本人学生 6 人、中国人留学生 1 人)が自身のワークシートに、「すぐに同意してしまって内容が薄かった、議論を深めるためには反対意見が必要だ」といった点を追加記入していた。本授業では、日本語母語話者による話し合いの規範を中心に分析活動を行っていたと言えるが、こうした外国人留学生の発言によって、また新たな視点から話し合いの留意点について意識化する機会となったと言える。

表6 受講生自身の話し合いの実践の振り返りの記述(各記述は筆者要約、下線は筆者が付した)

	良かった点	不足点・難しかった点	
①事前準備・前提	—	・事前準備が不足していた。	
②役割分担・進行	1. 司会の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・司会者が全メンバーに意見の確認を取っていた。 ・司会者がテンポよく進めていたので、ダラダラせず話が進んだ。 ・司会役の人がうまく仕切ってくれた。全員の意見がすぐ出なかった時、「例えば～」や「候補としては～」等できっかけを作ってくれた。 ・司会者が聞きとれなかった部分を他の人が伝えてくれた。 ・司会者も他の人の疑問点を読みとって聞き直していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・司会者の役割をしっかりと決めるべき。 ・はじめに司会者が決まるまでなかなか意見が出なかった。 ・司会者としてどのくらいで次の項目に移るか難しかった。 ・司会者を担当したが、グループに質問を投げかけてから反応がない場合、自分の意見を言うようにしていたが、押し付けがましくなった。しかし、他の参加者にも意見を求めることで、あまり独裁的になるのを防げた。
	2. 進行	<ul style="list-style-type: none"> ・時間制限もあって、効率よく話せた。 ・順序よく話せた。 ・全員が発言する機会があった。 ・話をしない人にも話を振った。 ・みんなの合意で話が進んでいた。 ・強い反対意見もなく、スムーズに進んでいた。 ・全員の同意(or 意見)を求めていたので全員が納得して結論を出せた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間の配分が難しかった。 ・時間が気になり1通りみんなが意見を言ったら適当にまとめて進めてしまい、議論が深まらなかった。 ・全員の同意を得ずに先に進もうとした。 ・参加者間に会話量のアンバランスさがあった。 ・人の話を聞いている時に待てないと思ってしまい、自分が話しすぎでバランスが偏ってしまった。 ・意見の引き出し方や、提案の仕方(言い出すタイミング)が難しかった。
③参加態度	1. 態度	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が会話に参加しようとしていた。 ・お互いの意見を聞いて良い話し合いができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり深く考えずに発言していた。 ・自分に興味があるトピックでないとアイデアが浮かばず話し合いが進まなかった。
	2. 非言語行動	—	・ジェスチャー等の非言語的なコミュニケーションを理解するのが難しかった。(留学生 A)

④話し方	1. 内容	<ul style="list-style-type: none"> 意見が豊富に出てきた。 いくつか選択肢を提示した時に、議論が活発化した。 妥当な理由を付けられていた。 話がそれなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 話がそれてしまい、効率が悪かった。 ユーモアを求めるあまり話が脱線してしまった。
	2. 意見の述べ方	<ul style="list-style-type: none"> 誰かの発言に同意している時、追加意見等を言えばただ同調してるだけでなくちゃんと賛成している気持ちが表せたと思った。 相手の意見を否定せずにできた。 意見を頭ごなしに否定したりせず、穏やかに進んだ。 自分の意見が否定されないか、心配だった。 	<ul style="list-style-type: none"> 意見と提案を出した時はちょっと心配になる(どのような言葉遣いがよいかについて)。(留学生 B) 相手と違う意見を提出したが、素直で言い出してしまったので、これからはもっと意識し、相手の意見を承諾してからまた自分の考えを提出したほうがいいと思った。(留学生 C) 反対意見がないと視野が狭くなることもある。(留学生 A) 誰かが意見を言うと、皆が同意するというように、意見があまり出なかったので、内容が薄かった。 議論を深めるには反対意見があった方がいい。
	⑤相手への配慮・理解	<ul style="list-style-type: none"> 冗談等雰囲気をやわらげる発言がみられた。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の言いたいことを汲みとろうとする姿勢があったが、察するのは難しかった。
	⑥環境・人間関係	<ul style="list-style-type: none"> 全員が思ったことを言える雰囲気、全員一度は意見を言った。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分は初めてのグループだったので、少し気を遣ってしまった。

なお、表 6 の記述のほかに、受講生の中には、この授業中の自分達が行った「国際交流会の企画」の話し合い体験が架空の設定であったために感じたことについて記述している者もいた。例えば、「架空の設定のため、自分達の話し合いをするモチベーションが高くなく意見が出しにくかった」といった記述のほか、「今回は細かく内容を決めず、自分の意見を通そうとする気持ちがなく、賛成しやすかったが、実際の話し合いでは意見の衝突等も出てくるはずだから、そうした時の振舞いは難しいだろう」という記述も見られた。これにより、受講生には話し合いの際の当事者としての意識の高さ、モチベーションの重要性、および、実際の話し合いの難しさがより意識化できたのではないかと考えられる。そして、こうした授業中の架空の話し合いの活動をどのように実際の話し合いの場に繋げていくかを検討していくことも必要であろう。

3. 4. 話し合いの分析活動での気づき・今後気を付けたい点の記述

表 7 は、「(5) 今後の活かし方の検討」として、受講生がワークシートに記述したものを筆者が内容ごとに分類し、項目名を付けて、代表的な例のみ抜粋してまとめたものである。この活動では、受講生が話し合いの分析活動での気づき、および、今後の気を付けたい点について、ワークシートに記入している。なお、表 7 の外国人留学生の記述には、留学生の記号名(例: 留学生 A)を末尾に示し、日本人学生の記述と区別してある。以下、受講生が主に学んだことについて、表 7 の下線部を中心に述べる。

まず、「①会話データ分析活動からの気づき」としては、良い例・悪い例のビデオの分析活動を行うことで、話し合いの留意点が意識化でき、それによって今後の自身の話し合いがうまくできるようになるということが分かったという記述が見られた。また、「全体で一つのものを形づくっていく」話し合いのプロセスに興味を持った受講生もいた。

次に、「②話し合いの実践と振り返りからの気づき」としては、「1. 話し合いの体験」を実際に行うことで、自身や他者の「話し合いを客観的に評価」できる機会になっていたという記述が見られた。「2. 司会・進行」に関しては、実際に話し合うことで司会者の役割の重要性に気づいたという記述が見られた。「3. 異文化間での話し合い・意見をぶつけ合うこと」に関しては、話し合いの仕方にも文化の違いがあること、異文化の人々と交流する際に自身がこれまで学んできた日本流の話し合いの仕方に気づけることについて指摘する記述があった。また、「雰囲気の良いさを重視しすぎて意見がぶつかることを恐れて議論が深まらないことも多々ある」といった日本人の話し合いの傾向を意識化し、「自分の考えをきっちりと表現することが必要だ」と述べる記述もあった。これらの記述は、日本人学生によるものであるが、本授業の中で日本人学生と外国人留学生がともに、話し合いの留意点について検討したり、実際に話し合いを行ったりすることで、特に日本人学生が日本流の話し合いの仕方について意識化し内省する機会を与えやすくていたのではないかと考えられる。これは、3.3 で見た、ブラジル人留学生 A が「反対意見がないと視野が狭くなることもある」という意見を授業の全体討論で述べたことにより、他の日本人学生が自身の話し合いの仕方を振り返るきっかけとなっていたことから分かる。「4. 実際の話し合い」に関しては、本授業での架空の設定の話し合いでは問題がなかったが、実際の話し合いでは授業で検討した話し合いの留意点について気を付けられるかは自信がないという記述があった。

さらに、「③今後気を付けたい点」としては、「1. 司会の仕方」「2. 意見を言う」「3. 社会人の話し合い」に関する記述が見られ、今後の大学生活、社会人生活の中で遭遇する話し合いで留意したい点について述べている受講生がいた。「4. 言葉遣い」に関しては、外国人留学生が意見の言い方等の言葉遣いに迷っている、反論はやわらかく言うようにしたい等、日本語の言葉遣いに気を付けたいと述べる記述が見られた。

表7 話し合いの分析活動の気づき・今後気を付けたい点に関する受講生の記述（受講生記述抜粋、下線は筆者が付した）

① 会話 データ 分析 活動 から の 気づ き	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いを客観的に分析すると「なぜこの話し合いは上手くいったか/失敗したか」という点が見えてくることに気づいた。また分析することで今後の話し合いの進め方、発言の仕方<u>で注意すべき点を考えることができる</u>ということにも気づいた。 ・話し合いがヒートアップしてくると、どうしても感情的になってしまう例や、話し合いの中で伝え方が悪かったり、受け取り手がどう受け取るかによったりして<u>雰囲気が悪くなってしまう例を見たが、現実でもよくあることだ</u>と思う。このような例が起こりうる<u>ということを話し合いの前に少し意識するだけでも、話し合いがスムーズに進むことにつながるのでは</u>と思った。 ・雰囲気によって話し合いの進み具合が変わるということは面白かった。仮に自分が良い意見を出していても場の雰囲気を悪くしていたら全体の生産性は悪くなる可能性があることに気づき、<u>全体で一つのものを形づくっていく点に興味をひかれた</u>。
--	---

② 話し合いの実践と振り返りからの気づき	1. 話し合いの体験	<ul style="list-style-type: none"> 自分の話し合いや他の人の話し合いを客観的に判断(評価)する機会はなかなか無いので面白かったです。
	2. 司会・進行	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いを円滑にうまく行うためには全員の協力はもちろんだが、司会進行役の人の働きはとても重要になると思った。自分達が実際に話し合ってみて、司会の人があまく話をリードしてくれたり落とすところを見つけてくれたおかげでとても円滑に進んでいたと思う。
	3. 異文化間での話し合い・意見をぶつけ合うこと	<ul style="list-style-type: none"> 時間を守る、一人一人意見を言う等よりよい話し合いの要素の中にも文化や方式の差というのが国ごとにあるのだと知った。日本式のように和やかに進めていくことが必ずしも最善策ではないのだと感じた。 思っていたよりも多くの条件が合わさらないと、スムーズに議論が進まないのだと感じた。そして普段の話し合いで何とかうまくいっているように感じられるのは、この話し合いの方法の成功例を、小さい時より学校で経験し、学んできたからだと思った。例えば、これが違う文化をもった人々との交流となった時には、自分の教えられてきたやり方が、いかに日本流に沿ったものだったかを認識することができるだろう。 日本人は特に女子同士の話し合いだったりすると雰囲気の良いさを重視しすぎて意見がぶつかることを恐れて議論が深まらないことも多々あると思う。そのようなクセを日本人自身が意識して議論に臨むだけでも、また違った議論ができるのではないかと感じた。 留学生のコメントから、やはり日本人は予定調和的に意見を合わせてしまい、意見を闘わせることが少ないので、それだと本当に良い意見は中々辛いと思うので、自分の考えをきっちりと表現することが必要だと思いました。
	4. 実際の話し合い	<ul style="list-style-type: none"> 授業内だけの関係なので、なごやかに話し合いができた一方、これが本当に決めなければならずヒートアップもしてしまいそうな話し合いのときにできるかは自信がもてなかった。
③ 今後気を付けたい点	1. 司会の仕方	<ul style="list-style-type: none"> いい司会の仕方(話の振り方、時間配分、まとめ方)を身に付けたい。
	2. 意見を言う	<ul style="list-style-type: none"> 私は、よく意見があるのに言わないよねーと言われるので、これからは周りへの配慮を持ちつつももっと積極的に発言したい。
	3. 社会人の話し合い	<ul style="list-style-type: none"> 普段話し合いで困った経験があまりなく、話し合いの悪い例を見て衝撃を受けた。これから社会人になると、コミュニケーションが苦手な人との話し合いにも遭遇すると思うので、今回の分析を生かしたい。分析の中で1番問題だと思ったのは、話し合い自体に興味がなく意見を出さない人だった。このような人にどんな対策が効果的か考える必要がありそうだと考えた。
	4. 言葉遣い	<ul style="list-style-type: none"> 中日の話者交替と話題転換の仕方は異なってから、自分が意見とか提案とかコメントとかを出した時は、どのような日本語の言葉遣いを使うかについては迷っています。(留学生 B) 反論を提出する際に、もっとやわらかく言うことを意識しなければならないと思いました。(留学生 C) 話し合いでは、お互いの調和を合わせて、意見を尊重しながら進めるのが大事だということが分かった。言葉遣いで、相手をあまり刺激しすぎないような言葉に気を付けたいと思う。(留学生 D)

4. 本授業での受講生の学びの考察

以上の受講生の記述を分析した結果、以下の4点が明らかになった。受講生達が学んだ点、および、その学びはどのような活動から起きたのかについて、「議論教育における4つのスタイル」(表1参照)との関係からまとめる。

(1)事前知識・規範の検討(良い話し合い・悪い話し合いの要因):

受講生は、「①目的」「②相手」「③内容」「④場面」についての事前知識を整理し、「①事前準備・前提」「②役割分担・進行」「③参加態度」「④話し方(内容・意見)」「⑤相手への配慮・理解」「⑥環境・人間関係」に関する話し合いの事前知識・規範を意識化していた(表4参照)。この活動は、受講生が話し合いで重要となる留意点について自分達で検討するという形の「1.ルール提示型」になると考えられる。

(2)会話データ分析活動(話し合いの良い例・悪い例):

話し合いの良い例と悪い例(シナリオあり)のビデオを用いた、会話データ分析活動①では、予め教師が分析ポイント(「A.表現方法、話す順番、話す量、雰囲気づくり」「B.相手との関係性の維持」「C.相手への気づかい」「D.論理性・要点の伝え方」「E.内容の深まり・具体性」「F.聞き手の役割)を決めた教材であったため、この活動は「1.ルール提示型」であると言える。それと同時に、分析ポイントを教師が教え込むのではなく、受講生自身がビデオ教材を見て気づくようにしてあるという点で、「2.気づき支援型」の活動でもあると言える。これらの分析ポイントは、「(1)事前知識・規範の検討」で受講生が意識化した話し合いの留意点とある程度重なるところもあったと言える。

その後の話し合いの悪い例(シナリオなしの即興)のビデオを用いた、会話データ分析活動②では、「(1)事前知識・規範の検討」の活動で意識化した点をもとに、「攻撃的に反論する」「主観的な意見を言う」「諦めた感じで同意する」「ふてくされる」「反論を蒸し返す」「オドオドする」「感情的に責める」等、より具体的な話し合いの問題点を意識化していた(表5参照)。この分析活動は、シナリオのない現実により近い話し合いの演技から受講生自身が悪い話し合いになる要因を見つけ出し、意識化するという点で、「2.気づき支援型」の活動であると言える。

(3)話し合いの実践・振り返り:

上記(1)~(2)で意識化した話し合いの留意点に気を付けながら、受講生達が実際に「国際交流会の企画」の話し合いを行い、それを振り返った。受講生達が自身の話し合いで良かった点・不足点・難しかった点を当事者として具体的に意識化していた(表6参照)。また、外国人留学生からは、日本語での話し合いにおける言語・非言語での表現・理解に困難を感じたとする者もいた。さらに、外国人留学生がすぐに皆が同意して反対意見が出ないと議論が深まらないという点を指摘し、日本人学生達が同意を好む日本人的な話し合いの仕方を反省してみる機会も見られた。このような点から、この活動は、話し合いの留意点を意識化しながら自身の実際の話し合いの仕方に気づいていくという「1.ルール提示型」「2.気づき支援型」の活動であると言える。

(4)今後の活かし方の検討：

今回の話し合いの分析活動によって、話し合いの留意点が意識化でき、今後の話し合いの仕方を考える契機となっていたと言える(表7参照)。また、文化が異なる人との話し合いが難しくなるという点も指摘されていた。この指摘は、本授業で日本人学生と外国人留学生がともに話し合いについて分析し振り返ることを通して、問題意識としてより鮮明に挙がってきたのではないかと考えられる。

5. 話し合いの方法を学ぶための教材開発に向けた提案

以上の本授業での受講生の学びを踏まえ、より良い話し合いを考える教材とそれを用いた授業活動として、以下の4点の可能性が考えられる。

(1)話し合いの留意点の教材化：

本研究の表2~7でまとめた話し合いの留意点は、今後の授業で話し合いを行う際に、受講生に意識化させるための教材開発の観点にもなると考えられる。そして、日本人学生と外国人留学生がともに話し合いについて学べる場を設定することも必要だと言える。これにより、話し合いについてより多角的な観点から意識化できると言える。

(2)話し合いの言語・非言語の表現リスト作成：

本授業の外国人留学生からは、日本語の話し合いでの言語・非言語表現が難しいという指摘があった。外国人留学生に特化した日本語授業では、本授業で行った「1.ルール提示型」「2.気づき支援型」の活動だけでなく、「3.枠組み提示型」の活動として、話し合いで用いる日本語の言語・非言語の表現リスト(例:司会の仕方、意見の述べ方、ジェスチャー、視線、姿勢、音調等による表現・理解の仕方)のような教材を用いて、運用練習をする活動も必要になると考えられる。

(3)実際の話し合い活動を中心とした教育：

本授業で行った架空の設定の話し合い疑似体験では、話し合いの当事者意識とモチベーションが低く、意見の衝突が起こりにくかったが、実際の話し合いはもっと難しいだろうと指摘する受講生もいた。そのため、架空の設定での話し合いだけでなく、実際の課題解決を目的とした「4.協調学習型」のグループ活動を行う中で、話し合いの留意点を意識化し、より良い話し合いの能力を身に付けていけるような教材・活動を開発していくことも有効であると考えられる。

(4)話し合いの失敗経験を克服していくための自己改善活動：

話し合いの会話データ分析活動、話し合いの実施とその振り返りを行う「1.ルール提示型」「2.気づき支援型」「4.協調学習型」等の活動から意識化した話し合いの留意点、特に失敗要因等を積極的に取り上げていくことも重要である。そして、それらの失敗要因を実際にどのように克服してより良い話し合いができるようになるかといった自己改善のための教材・活動を開発していく必要がある。「話し合いの留意点の意識化-実践-振り返り-改善」といった活動を何度も繰り返して行っていくことが重要であると考えられる。

おわりに

以上、本研究では、日本人学生と外国人留学生が参加する学部授業において、より良い話し合いについて考える活動を通して、受講生がどのようなことをどのように学んだか分析した。その結果、話し合いについての「事前知識・規範の検討」「会話データ分析活動」「話し合いの実践・振り返り」といった「1. ルール提示型」「2. 気づき支援型」の活動を行うことで、「①事前準備・前提」「②役割分担・進行」「③参加態度」「④話し方(内容・意見・非言語行動)」「⑤相手への配慮・理解」「⑥環境・人間関係」といった話し合いの留意点について受講生達が意識化していることが分かった。また、日本人学生と外国人留学生がともに学び合うことで、新たな視点や自身の不足点等について気づいたりする様子が見られた。

今後の課題は、話し合いの教材・活動のさらなる開発のほか、それ以外の会話データ(例: 初対面会話、誘い、依頼、インタビュー、体験談、スピーチ、研究室・職場の会話、慰め)を用いた教材・活動の開発も進めていきたいと思う⁵⁾。これにより、日本人学生、外国人留学生を問わず、より良い会話の仕方についてともに考え、自己改善していけるような教育の場を提供したいと考えている。

文字化表記方法 (ザトラウスキー (1993)、中井 (2012) をもとに作成)

。	下降調か平調のイントネーションで文が終了することを示す。
、	ごく短い沈黙、あるいはさらに文が続く可能性がある場合の「名詞句、副詞、従属節」等の後に記す。
?	疑問符ではなく、上昇調のイントネーションを示す。
—	「—」の前の音節が長く延ばされていることを示す。
//	// の後の発話が次の番号の発話と同時に発せられたことを示す。
()	沈黙の秒数 (ストップウォッチで計ったもの)
{ }	{ } 中の行動は非言語的な行動の「笑い」等を示す。

注

- 1) 前年度の2017年度に行った同授業の1学期間の詳細は、中井(2018a,b)を参照のこと。
- 2) 本ビデオ教材は、東京外国語大学教員の菅長理恵氏と渋谷博子氏とともに開発した。6つの話し合いの分析ポイントA～Fを指定し、それが良い例・悪い例として際立って現れるように、演劇部の学生にシナリオを作成してもらった。そして、同演劇部の学生4名にシナリオ通りに演じてもらってビデオ教材化した。この話し合いの6つの場面の分析ポイントは、「丁寧さの原理 (politeness principle): 同意の公理、是認の公理」(Leech 1983)、「協調の原理 (The cooperative principle): 量の公理、質の公理、関連性の公理、様式の公理」(Grice 1975)、「聞き手の役割」(Nakai 2002、中井 2003)等を参考に設定した。
- 3) ビデオ撮影時は、事前に準備したシナリオはなく、演劇部の学生4名には、場面設定の説明をした後、自分達が悪いと思う話し合いの仕方を即興で6分程度演じてもらった。授業では、受講生がこの開始部から5分程度を視聴して分析した。
- 4) ワークシート記述をデータとして研究に使用することに対して、受講生の承諾を得ている。
- 5) 中井(2018a)では、初対面会話(母語場面、接触場面)、誘い、依頼、留学の体験談、インタビュー等、大学生活で身近な会話を取り上げ、会話データ分析活動を行う授業での受講生の学びを分析している。また、中井(2018b)では、インタビューの会話データ分析活動での受講生の学びを分析している。

付記

本研究は、2016～2018年度科学研究費（基盤研究(C)）「会話データ分析の手法を用いたインターアクション能力育成のための教材開発」（16K02800、研究代表者：中井陽子）、2019～2021年度科学研究費（基盤研究(C)）「インターアクション能力育成のための会話データ分析の手法を学ぶ教材開発とその検証」（19K00702、研究代表者：中井陽子）、および、2014～2016年度科学研究費挑戦的萌芽研究「文部科学省国費学部留学生のキャリア形成ーグローバル人材のロールモデルー」（26580092、研究代表者：菅長理恵）、2019～2021年度科学研究費（基盤研究(C)）「留学初年次から使用可能なキャリア形成支援教材の開発」（19K00732、研究代表者：菅長理恵）の成果の一部である。

参考文献

- 大塚裕子・森本郁代・水上悦雄・富田英司・山内保典・柏岡秀紀（2009）「科学技術コミュニケーションにおける対話のデザインー自律型対話の実践に向けてー」『人工知能学会誌』24(1), pp.78-87.
- 大塚裕子・森本郁代編著（2011）『話し合いトレーニング 伝える力・聴く力・問う力を育てる自律型対話入門』ナカニシヤ出版.
- 小笠恵美子（2001）「会話の話題展開における規範の分析ー授業中の話し合いを例にしてー」『言語文化と日本語教育』21, pp.110-121.
- 胡方方（2018）「第9章 ピア・リーディングの実践 授業にあたってどんな準備と工夫が必要か」石黒圭編著『どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』ココ出版, pp.205-232.
- ザトラウスキー、ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析ー勧誘のストラテジーの考察ー』くろしお出版.
- 富田英司（2010）「10章 議論活動と授業」高垣マユミ編著『授業デザインの最前線II 理論と実践を創造する知のプロセス』北大路書房, pp.152-166.
- 中井陽子（2003）「初対面日本語会話の話題開始部／終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16, pp.71-95.
- 中井陽子（2008）「日本語の会話分析活動クラスの実践の可能性」『ことばの教育を実践する・探究する』凡人社, pp.98-122.
- 中井陽子（2009）「会話を分析する視点の育成ーコミュニケーション能力育成のための会話教育が行える日本語教員の養成ー」『大養協論集2008』, pp.55-60.
- 中井陽子（2012）『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房.
- 中井陽子（2018a）「会話データ分析の手法を学ぶための授業実践ー学部生の学びの分析からの考察ー」『東京外国語大学論集』97, pp.203-225.
- 中井陽子（2018b）「インタビュー会話の分析活動から学ぶより良いインタビューの方法ー会話データ分析の手法を学ぶ学部授業での実践をもとにー」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』10, pp.36-44.
- 中井陽子（印刷中）「キャリア形成と人間関係構築のための授業実践ー2019年度中国赴日本国留学生予備教育における団長授業での試みー」『日本語教育論集』第9号国際シンポジウム篇 東北師範大学出版社.
- 水上悦雄・森本郁代・大塚裕子（2005）「プロの司会者の視点から見たグループディスカッションー素人の評価との比較及び相互行為過程の分析」『言語・音声理解と対話処理研究会』45, pp.19-24.
- 森本郁代・水上悦雄・柳田直美（2016）「第1章 話し合いの評価の観点とそれに影響を与える相互行為」宇佐美洋編『「評価」を持って街に出よう 「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』くろしお出版, pp.18-33.

- 結城佐織 (2020) 「上級日本語学習者に対する議論クラスの実践報告－日本研究者や実務者を指す大学院生を対象として－」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』12, pp.10-17.
- Grice, P. H. (1975) Logic and conversation. In P. Cole, & J. L. Morgan (eds.) , *Syntax and semantics 3: Speech acts*, New York: Academic Press, pp.41-58.
- Leech, G. N. (1983) *Principles of pragmatics*, London: Longman.
- Nakai, Yoko Kato. (2002) Topic shifting devices used by supporting participants in native/native and native/non-native Japanese conversations, *Japanese Language and Literature*. 36(1), pp.1-25.